有朋
「有朋自遠方来」
第33号

文化教育学部を教育学部及び芸術学部へ改革

有朋会会長　宮尾正隆

教員養成を目的とした佐賀県師範学校は明治17年（1884）に開設され、４年後、同窓会「有朋会」が明治21年（1888）に発足している。戦後昭和24年（1949）男子師範、女子師範、青年師範を統合した佐賀大学教育学部が誕生。平成８年（1996）文化教育学部（教員を目的とした学校教育と教員免許を必要としない国際文化、人間環境、美術・工芸）に改組され現在に引継がれている。ところが、大学と全学同窓会の合同会議における学長談話の中で、平成28年度より文化教育学部を更なる発展のため新しく教育学部及び芸術学部の２学部へ移行するための準備が進められているとの説明がありました。学部改革に伴い有朋会としても、将来の発展のために検討が必要となってきました。

有朋会は、古賀信夫前会長のおり、平成22年度から旧教育学部及び文化教育学部と有朋会を統一した全学同窓会に参加しました。事業に於いても、名簿では、平成15年を最後に個人への配付を取りやめ、今回、平成26年全面改訂版を発刊して各支部へ１部ずつ配付致します。今後は、会員の動向を毎年調査し本部に於いてデータ管理を行います。季刊誌では、「有朋」第30号を最後に平成24年度より経費削減のため12ページのタブロイド版へ変更し全卒業生に配付しています。追悼会は、経費削減のため11月末に開催し、総会・懇親会は８月末に開催して、還暦の卒業生を加えた行事に変更しました。また、支部に於いては多忙化対策として支部長会と事務担当者会を合同会議として回数を削減。弔辞については、間に合わない場合は弔電を本部から打電することにしました。このような改革については瀬戸口悟（在任期間2007～2013）前事務局長在任中に行って来ました。今後に於いても更なる改革が求められるところです。

▲旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年を記念して建設された佐賀大学正門と佐賀大学美術館（平成25年10月）▲

▲佐賀大学文化教育学部１号館改修完成（平成26年３月31日竣工）▲

佐賀の素晴らしさ

H16院修　県庁支部　空　閑　宏　史

私は佐賀市で生まれてから、一度も市外に住んだことがありません。そのため、佐賀の良さを気づかずに過ごしてきた気がします。

ところが、ここ数年、他県の方に佐賀市を紹介する機会が多くあり、その感想を聞いていると見慣れた景色が違ったものに見えてきました。

佐賀市は、北は脊振山系から南は有明海に至るまで美しい緑に囲まれた自然豊かな所です。佐賀平野の田園風景、ムツゴロウが飛び跳ね干満の差日本一といわれる宝の海“有明海”は、後世に残していきたい環境です。

また、歴史的・文化的遺産も数多くあります。約7000年前の貝塚遺跡である「東名遺跡」、古代肥前国の行政府跡「肥前国庁」、中心部の「長崎街道」や「佐賀城公園」、世界遺産登録を目指している「三重津海軍所跡」、早稲田大学創設者の「大隈重信侯の生家」等です。

食べものは、日本一の生産量を誇る「佐賀のり」や、日本穀物検定協会「米の食味ランキング」で、４年連続で特Ａ評価を獲得した「さがびより」等、米よし、水よし、お酒よしの土地柄です。観光も秋には青空を背景に多数の熱気球が舞い上がる「インターナショナルバルーンフェスタ」があります。

大学時代に、県外の友人たちから「佐賀市は県庁所在地なのに見るものが何もない。」と言われ、悔しい思いをしたことがありましたが、自分自身がその良さに気づいておらず、説明できなかっただけだと今は反省しています。

今後は、子どもたちに佐賀の良さを伝え、地域の伝統や文化について理解を深め、尊重する態度を身に付けさせたいと思います。さらに子どもたちが、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共存していくことの大切さを理解できるところまでつなげていきたいと考えています。

花が咲く

H21卒　県総合福祉センター勤務　坂　本　みなみ

教育心理学選修を卒業して６年目となりました。卒業後は福岡の大学院で臨床心理学を学び、教育相談機関や病院で臨床心理士として働いていました。昨年度から生まれ育った佐賀に戻り、地元に恩返しのつもりで今の仕事をしています。家族や友人と会うことも増え、大学の先生方ともご縁があるため帰ってきてよかったと感じます。

今の職場では、児童相談所で様々な子どもたちや保護者、関係機関の方々とお会いします。相手の話に耳を傾けること、心という目に見えないものに対して援助をしていくことは難しく、悩んだり落ち込んだりの毎日です。

そのような中で、今年からお花や観葉植物を飾るようになりました。植物が部屋にあるとほっと心が和みます。ズボラな私は切り花をそのまま花瓶にさすことがほとんどですが、４月ごろから暖かくなり花はすぐに開くようになりました。観葉植物は手入れもあまり必要ないだろうと思い、手ごろなものを探していると、セダムという観葉植物を見つけました。可愛らしい小さな多肉の葉がみっしり生え、小ぶりでなんとも癒されます。土が乾いたら水をあげ、晴れた日は外に出してと世話をしていると、ぐんぐん成長し、あっという間に茎が伸び葉が増えていきます。そしてある日帰宅すると、黄色い星型の花が咲いていました。これは花が咲くのか！と大変驚きました。

忙しい中で目の前のことしか見えず、成果が現れにくいことばかりで苦しい時期だったため、とても新鮮な気持ちになりました。もしかすると何事も、栄養を吸収しひそかに根や茎を伸ばすことで力を蓄え、いつか花が咲く瞬間があるのかもしれないと思わせてくれました。私自身、まだ成長段階であり、壁にぶつかっても次のステップの栄養になると信じていきたいと改めて思います。様々な人やものから養分を頂いて、じっくり目の前のことに向き合うことで、成長していこうと近頃思っています。

親が死に、子が死に、孫が死ぬ

S51卒　白石支部　**原　﨑　慶　輔**

表題は、ある結婚式での某有名作家の祝辞です。縁起の悪いこととして忌み嫌われるとんでもない言葉ですが、実は意味があるのです。「孫が先に逝ってはいけない、親より子が先に逝ってはならない、年の順番通りに仏様になりなさい、長生きをして親孝行をしなさい」という新郎新婦への心温まるお祝いの言葉だったのです。これを聞いていた両家の両親は涙して喜んだと聞いております。

平成26年１月２日、拙宅でのめでたい話。極めて個人的な話で申し訳ありません。父の米寿（88歳）、母の卒寿（90歳）を記念して、ささやかな宴を催しました。私たち兄弟３人の子夫婦、孫９人、ひ孫７人、親族40人余りが集まってのお祝いでした。

主催者である私から両親のこれまでの人生の紹介、謡曲、カラオケ、ひ孫へのインタビューと続きます。進行したのは孫である私の長男、祝辞を述べたのも孫である私の次女、花束贈呈はひ孫の二人です。続いて老父の感涙した挨拶。折しもこの年は、私の還暦と重なりました。誕生日に有明東小学校の先生方から戴いた赤いちゃんちゃんこ・帽子を着飾り、親子三人揃って「はい、ピース！」今更ながら、やっと親のありがたさがわかる歳になりました。そして、人生の縁を感じずにはいられません。

織田信長の時代は人生50年。今や人生90年。やはり人は長生きした方がいいに決まっています。長く生きていれば何かいいことがきっとあります。

有朋会の皆様、ピンピンコロリまでがんばりましょう。有朋会のますますのご発展を祈念いたします。

最近、気になったこと

S58卒　鳥栖基山支部　**納　富　義　博**

「プロ野球選手になって三冠王になります」「サッカー選手になってヨーロッパで活躍します」「科学者になって世の中の謎を解き明かします」「発明家になってノーベル賞をとります」「獣医になってたくさんの動物を救います」「画家になって世界中の風景を描きます」…子どもたちの夢や希望は大きく輝いている。

最近では「人々を喜ばせる仕事がしたい」「人の命を救う仕事に就き、みんなを幸せにしたい」「困っている人を助ける仕事に就きたい」…やや抽象的で具体的ではないが、このような希望を口にする子どもが増えてきたような気がする。もちろんこれは、具体的に言うことを照れて口にする子どもがいるのも事実であるが、心からそう願い、口にしている子どもがいるのも事実である。

先日、内閣府が世界７カ国（日本、韓国、米国、英国、ドイツ、フランス、スウェーデン）で実施した意識調査では、「日本の若者は自己評価が低く、将来を悲観している一方、自国の役に立ちたいと考える割合はトップであった」また、「社会貢献したいのに自信が持てない日本の若者の姿が浮かび上がった」と伝えている。「自分自身に満足している」１位の米国86.0%、最下位は日本45.8%。「自分に長所がある」１位の米国93.1%、最下位は日本68.9%。「自分の将来に希望を持っている」最下位の日本61.6%。「40歳になったとき幸せになっている」最下位は日本66.2%。…その中で「自国のために役立つことをしたい」だけが、日本54.5%で第１位。これは、日本の震災等の世相を受けている部分も多分にあると考えられるが、教育現場に携わる自分としては気になった。その一方で「自分の参加で社会現象が少し変えられるかもしれない」は、30.2%とやはり最下位となっている。

学校現場では、子どもたちに自己肯定感をいかに育んでいくのかが大きな課題であるとともに多くの教育的な取り組みが行われてきているはずである。学校を含めて家庭・地域が一体となって若者を支え、育む環境作りを再度構築していかなければならない。

心豊かに　すこやかに

S57卒　伊万里西松浦支部
吉　村　清　美

現在の勤務校、伊万里小学校へは、平成25年４月に二度目の赴任をした。15年前、初めて伊万里で勤務した学校が、伊万里小学校だった。その時は、教務主任として全校の児童に関わることができた。児童の数も多く、大変忙しかったが、担任を離れて学校や児童を見る視点が変わったことを覚えている。特に『心豊かに　すこやかに』という校訓は、頭の中に強く残っていた。

伝統ある伊万里小学校の校訓として、脈々と受け継がれた思いを感じることができたのかもしれない。

今回、二度目の勤務となり、しかも校長として改めて校訓を考えてみると、今までとは違った感慨を感じることができた。

そこで、この思いを子どもの姿で、具現化していくために、子どもたちには、わかりやすい言葉で合い言葉を考えた。

○みんなで、楽しい学校を創ろう。
○がんばった人が、認められ、誉められる学校にしよう。

楽しい学校を創るためには、自己中心ではなく、人の気持ちを考え、行動することが求められる。また、「努力は、裏切らない」という格言のごとく、どんなことでもいいから、がんばった人が、みんなから認められ、誉められるような校風を創ることが絶対に必要なことと考えたからだ。

学校に登る坂道を、「がんばり坂」と呼んでいる。その坂道の真ん中ほどに、白い少年・少女像がある。その像の台座に『心豊かに　すこやかに』と刻んである。

毎朝、この「がんばり坂」を登るときに、少年・少女像を見て、楽しい学校を創りたいと思いを新たにしている。

感謝の気持ちを忘れずに

S63卒　小城多久支部
石　田　俊　二

「道に志し徳に拠り仁に依り芸に遊ぶ」

玄関をくぐると、早速、「論語」が目にとび込んできます。そして、校舎内に目を向けると、至る所に孔子の教え『論語』が息づいています。それは、私の勤務する西渓校が、聖廟のお膝元にあり、論語の教えが、子どもたちの生活と密着しているからです。「己の欲せざる処。」と、子どもたちに語りかけると「人に施す事なかれ。」と元気に返答してきます。「意味は？」と問うと「自分が嫌なことは、人にはしてはいけない。」と素早く反応。更に「今、あなたがしていたことはどうかな？」と切り返すと、子どもたちの規範意識の向上につながります。一事が万事、子どもたちの生活に論語が生かされています。

さて、西渓校は、平成25年度から二つの小学校と一つの中学校が統合され小中一貫校となりました。昨年度は、教職員にとっても、子どもたちにとっても、大きく環境が変化した一年になりました。不易の部分は大切にしつつ、新しい学びの機会を創造する活動等、手探りの日々でした。しかし、このよう状況でも、論語が生活の中に生かされているせいか、子どもたちの優しさ溢れる場面、何事にも懸命に取り組む場面に遭遇しました。例えば、春の遠足では、九年生が一年生をおんぶして山を下山。縦割り掃除では、上級生が下級生に掃除の仕方を熱心に指導。小中合同の委員会活動、学校生活をみんなの力でよくしていこうとする様々な取組。等々、まさに、「よく人と交わる久しくしてこれを敬す（人とよく交際する。そして、敬意を失わない）」のごとくです。

このような子どもたちの様子を見るにつけ、私自身の有り様については猛省の日々です。子どもたちにとって、また、子どもたちを支える先生方にとっても一度しかない大切な一時。私自身がきちんと先生たちと協働できているのか、子どもたちの成長を後押しできているのか。先の論語ではありませんが、日々、感謝の気持ちと努力の心を借しまない自分でありたいと思う日々です。

神　埼　支　部　便　り

神埼支部では、２年に一度総会を開催します。平成25年度がその年に当たり、２月９日、「菊水」（神埼町）において、総会・懇親会を行いました。本部から、宮尾会長様、瀬戸口様にもおいでいただき、有朋会の現状についてお話いただきました。

懇親会では、あちらこちらで話の花が咲き、親交を深めることができました。本部から持ってきていただいた「有朋会（幕）」の前での集合写真もよい記念となりました。　（前支部長：永野篤子）

小中学校の文化の違い

S56卒　江北支部
川　﨑　健　二

以前、私は江北中学校に勤務していましたが、３年の間隔を置いて、今春から江北小学校勤務になりました。同じ町内で、しかも一つの小学校から一つの中学校です。同じような雰囲気と思いきや、そこは小学校と中学校の文化の違いを感じている毎日です。

赴任して、まずびっくりしたのが先生方の帰宅時間が遅いこと。私はこれまで「小学校は部活がないので、早く帰られる」と思っていましたが、実情は逆。空き時間がないので、子どもたちを帰してからが教材研究の時間でした。

空き時間がないので、先生方はほとんど教室におられます。したがって、職員室はいつも閑散とした状態。中学校では常時半数近くおられて、冗談も言い甲斐があったのですが…。

そんなに忙しい最中でも、昼休みは子どもたちと遊んでくださいます。運動場でサッカーやドッジボールをしたり、教室で添削等しながら子どもたちと話をしたり。江北中では失われた教育の原点が、ここにはありました。なお、ストレス解消なのでしょう、一番遊んでおられるのは教頭先生。少し責任を感じています。

意外だったのは、給食が少ないこと。同じ給食センターが作る同じ料理です。ですが、どう見ても少ない。理由は小学校の食器が中学校のより小さいからです。給食費も小学校の方が若干安く、「おなかと財布に優しい」給食になっていました。

他にも、放課後に部活動（社会体育）をしている先生がおられないことや、中学校では先生方が強く希望される「学年持ち上がり」にあまりこだわりがないこと、男女混合名簿で名前に全部「さん」をつけること、などなど。本当にびっくりすることばかりです。

なお、一番閉口しているのは登校時間に校門で子どもたちと「握手」をすること。前任の藤井校長先生が築かれたすばらしい伝統を壊すわけにもいかず、５月を迎えても一向に嘔吐下痢が減らないのは、自分のせいではないかと心配をしています。

子どもたちのための教育改革を

S43卒　三養基支部
田　中　俊　典

いま、国においては、政府の教育再生実行会議からの数次にわたる提言に基づき、教育委員会制度改革や英語教育改革、道徳の教科化など、様々な教育改革が進められようとしております。どれをとっても、子どもたちの教育のために、よりよくなるよう慎重に考えていく筈のものです。

私は、４年ほど前から教育委員として町の教育行政に携わっております関係で、「教育委員会制度改革」について考えを述べさせていただきます。

現行の教育委員会制度は、権限が分散され分かりづらいとされております。しかし、これは教育の政治的中立性を考えたとき、ある一定の人物に権限を集中させないためのものです。教育委員会を合議体とし、教育委員長といえども個人的には何ら権限を有しない仕組みとしたのも意味のあるものです。

首長は、予算執行権、議案提出権などの権限の行使、教育委員会は、執行機関としての役割を果たし、教育長は教育事務全般に渡り委任された事務を最高責任者としての自覚のもと教育委員会の同意と協力を得ながら事務に専念する。

このような、権限の分散は、教育の政治的中立性、継続性、安定性の担保を目的として考え出された優れた仕組みだと考えております。

教育再生実行会議の提言を受けて、中教審の答申が出される中、平成26年３月５日自民・公明両党の教育委員会制度改革を検討する作業チーム（座長・渡海紀三郎 元文部科学相）は、自治体首長が主宰し教育委員と有識者らが緩衝的働きとなる「総合教育会議」を全自治体に設置することで合意したとのことです。

教育長職は教育委員長職と統合して、「代表教育委員」として、首長が定める教育行政の指針となる「大綱的方針」に沿って教育行政を行う、とされております。

今後政党間協議でさらに変化する可能性もありますが、教育改革の動向が、真に子どもたちや若者一人一人の状況とニーズに応じた教育を通じて、子どもたちや若者の成長と発達を保証し、その現在と未来における幸せの礎を築くことを願った教育改革であることを願っております。

最後の授業

S50卒　神埼支部
平　野　禎　亮

書斎の本棚には背表紙に「祝退職　最後の授業、鳥栖市立鳥栖小学校」と書かれたDVDがあります。ちょっとしたきっかけで、「校長先生、退職の最後に私たちに国語の授業をみせてください。」と頼まれ、安請け合いで「はい。」と言ってしまいました。

その日から題材は何にしようか、どの学年でしようかと迷いの日々です。日数だけが過ぎていきます。六年生を担任していたときの印象に残っている教材、八木重吉の「影」という詩で授業を行うことに決めたものの、全職員が参観し授業研究会も行うということでしたので、指導案作成に向け教材研究に取り組むことになりました。

影　　八木重吉

秋／地にひろがる／ひかりをみていたらば／
影もおちていた／
かげと光は／ころころとあそぶ

題名も入れて僅か７行の詩です。全文はひらがなが多く、漢字は「影・秋・地・光」の４文字です。その上、同じ言葉（ひかり・光）（かげ・影）が使い分けられています。漢字で書けばよさそうなものを…。このことから、何か作者の心情が意図的に表現されたのではないかと考えます。光と影が織りなす自然の情景を眺めて、病弱である作者自身の状況を考えたのではないかと…。

一語一文に目を配りながら、五年生の子どもたちに言葉に込められた作者の思いを考えさせる授業を仕組んでみました。45分の時間があっという間に過ぎた気がします。子どもたちに学ばせることができたのか反省ばかりです。

授業後のある子の感想です。「こんな短い詩にこんなにたくさんの考えがあるなんて思いませんでした。目・心などの五感で文章を読むことの大事さが分かりました。」

最後の授業、試行錯誤の連続でした。一人一人の感想を読みながら、子どもたちは、言葉の大事さを少しは考えてくれたかなと自己満足をしています。「はい。」の返事をしてから授業を行うまで、大変だったけど楽しい時間を過ごすことができました。１時間の授業の大変さも実感しました。本棚のDVDが「授業を振り返ってみては？」と話しかけているようですが、悪戦苦闘した「最後の授業」は、まだ見れないでいます。

外から小中学校を見て

S56卒　佐賀市西部支部
中　村　祐二郎

今年４月から佐賀市教育委員会学校教育課長として勤務しています。学校経営ヒアリングや学校訪問を通して校長先生の学校経営の思いをお聞きしていると、「こんな学校を創りたい。」「こんな子どもを育てたい。」という熱い思いが伝わってきます。３月まで市内の小学校にいたので、「私も、昨年まで同じような思いでがんばってきたけどな…。」という羨ましさとともに、校長先生の思いが実現するように、できる限り協力したいという思いもつのってきます。

さて、外から学校を見て感じることは、それぞれの学校が、学力向上やICT利活用教育、小中一貫教育、地域連携、道徳教育、体力つくりなど、子どもたちの実態や地域の実情、教育課題に応じた特色ある取組を行っているということです。変化の激しい教育界ですので、やらなければいけないことはたくさんあるのですが、どこに重点を置いて子どもたちの指導に当たるかは、校長の学校経営ビジョンにかかっています。「こんな工夫があるのか。」「この視点は気付かなかったな。」と、とても参考になり、このようなよさを多くの学校に広げていきたいと思いました。

各学校にはよさがたくさんありますが、なかなかそのよさが保護者や一般市民に伝わっていない状況があるように思います。「学校だより」を配付したり、学校ホームページを更新したりすることも大切ですが、たくさんの人に学校の状況を直接見てもらうことも重要だと思います。子どもたちががんばっている姿や、先生方が一生懸命に指導・支援をしている姿を見ていただくことで、学校に対するイメージを変えてもらうことになるでしょう。また、授業や活動に積極的に参加してもらうことで、そのまなざしや言葉かけが、きっと子どもたちの自信と意欲を高めることにもつながると思います。

各校の運動会を見させてもらい、たくさんの元気をもらいました。子どもたちの笑顔があふれる学校を佐賀市にもっともっと増やしたいものです。

先生ランナー

H23卒　武雄支部
末　廣　佳奈恵

平成26年２月、武雄市代表として初めて県内一周駅伝に出場しました。

私にとって駅伝は特別なものです。仲間と心を一つにして襷をつなぐことで何か特別な感情に包まれるからです。大学時代には、駅伝に向けスポーツ生理学の研究をしたり、仲間と合宿で40キロ以上走り込みをしたりするなど、かける思いには大変強いものがありました。

今回、駅伝出場のお誘いを受け、大学時代の日誌を振り返りながら練習を始めました。社会人になり陸上から遠ざかっていたので、思うように走ることのできないもどかしさや諦めもありました。しかし、駅伝メンバーの方は仕事の傍ら、練習にも熱心に取り組まれていました。競技場に向かうと、仕事のあと、どんなに遅くなっても、真っ暗な中に競技場で誰かしら練習をしている姿をみて「言い訳をしていられないな」と感じました。同じ社会人で陸上をがんばっている方のモチベーションの高さや時間の有効な使い方は大変勉強になりました。「時間のせいにするのでなく、自分がどうなりたいかという強い思いがないと、何をやっても中途半端になる。」と言われ、改めて自分の気持ちにもスイッチが入りました。

本番では、担任している子や地域の方、大学時代の監督などたくさんの応援に包まれて気持ちよく走ることができました。みなさんからの声援は、どれも心に響き、ただ走るだけでなく、私は多くの仲間に恵まれている、仲間がいるから陸上が好きだと考えながら走りました。学生時代は、ストイックに結果を出すことにこだわっていましたが、社会人となりこれまで続けてきた陸上競技を通してたくさんの人にパワーを与えたい、そして、子どもたちにもがんばることの大切さを伝えたいと思いました。

現在、二年生の担任を仰せつかっています。学級目標の「元気・やる気・根気」をしっかりと子どもたちに伝えたいと思います。そのために、まず自分が手本となり、子どもたちに負けない明るさや最後まで一生懸命に取り組む姿勢を大切にしていきます。

これからも感謝の気持ち、がんばることの大切さ、を教えられる先生ランナーを目指します。

佐賀大学美術館に想う

S58卒　旧唐津支部
原　口　　毅

美術館は、大学の正門からすぐに見えた。

平日でまだ学生の往来も多かったのだが、初夏の日差しを浴びた美術館前の石段に腰掛ける若い親子や、犬の散歩を楽しむお年寄りの姿などもあった。当時と変わらないラクウショウの並木道と、白いガラス張りの美術館とがつくる新しい空間は、開館半年余にもかかわらず、すっかり大学キャンパスの風景として馴染んでいるように思えた。

入口がどこかも分からず入ってみると、すぐに展示スペースになっており、二つの展覧会が開かれていた。そのうちの一つ、小木曽誠准教授の指導を受けた学生、卒業生による「ADOMANI展」は、表情豊かで光や温もりを感じる作品が多かった。

こうした展覧会の印象ばかりでなく、美術館が大学関係者に限らず一般市民の利用もでき、どこからでも入れて自由に見られる造りになっているなど、とても明るく開放的な感じを受けた。

受付で、一冊の小冊子を見つけた。「美術・工芸教室60年の軌跡Ⅰ～特美の育成者たち」という、美術館開館記念特別展に寄せた冊子だった。

ページをめくっていくうちに、学生時代にお世話になった先生方や同窓生との思い出が、少しずつよみがえってきた。小学校課程図工選修だった私にとっては、絵を描きに大学に来ている特美の仲間との圧倒的な画力の違いに劣等感を持ち続けた五年間であり、ほろ苦い思い出が多かったが、それでも美術科の先生方は温かかった。

「木の枝や葉っぱのその隙間の向こう側に見える景色が、私はたまらなく好きですねえ。」と語られた牛塚和男先生。「油絵１」でバケツを描いた絵を見て「このバケツは誰かに蹴られていましたか。」と笑いながら評された深草廣平先生。卒業制作でお世話になったデザインの萩原孝三先生には、「仕事量でだったら、特美の連中にも負けないことはできますよ。」と励ましてもいただいたものだった…。

受付の女性の声に、30年前の世界から呼び戻された私は、美術館を後にした。美術館北側の一、二階ではカフェが営業中であった。この次は、佐賀市内の美術館も巡り、ここでゆっくりとお茶を飲んで芸術的感傷に浸るのも悪くないと思った。

地域とともにある「魅力ある学校づくり」を目指して

S61卒　旧東松浦支部　**藤　田　裕　之**

本校は、平成５・６年に校内暴力などの問題行動が続き、学校が大変荒れた時期がありました。学校のこうした状況を憂慮した保護者は、育友会を中心に臨時保護者会や校内外の巡視指導などを行い、学校と一体となり正常化を図った経緯があります。当時は全国的に少年をめぐる犯罪やいじめなどが社会問題化しており、北波多村教育委員会においては、子どもたちの健全育成には地域ぐるみで取り組む必要があるとして、村教育委員、村議、公民館、警察官、小・中学校校長、園長などによって「教育を語ろう会」が立ち上げられ、各地域に出向いて対話を始めることとなりました。合併後は、北波多地区青少年育成協議会が主体となり、その活動は現在も継続しており、今年で16年目となります。このように本地域は、地域ぐるみで子どもの健全育成に取り組んできた風土があり、また、学校に対する地域や保護者の期待も大変大きいものがあります。

国においても、平成16年より学校運営協議会制度を設け、地域の人々が学校運営に参画するコミュニティ・スクールの取組を推進しており、全国で現在1,570校が指定されるなど、年々増加している状況にあります。

こうした取組を通して、学校と地域の人々が目標を共有し、一体となって地域の子どもたちをはぐくんでいくことは、子どもの豊かな育ちを確保するとともに、そこに関わる大人たちの成長も促し、ひいては地域の絆を強め、地域づくりの担い手を育てていくことにもつながります。

昨年度は、「“進” 魅力ある学校づくり推進事業」及び「いきいき学ぶからつっ子事業」の指定を受け、小・中連携をはじめとして、校区内にお住まいの一人暮らしのお年寄りに、全校生徒で作ったミニ門松を贈るなどボランティア活動にも積極的に取り組みました。今年度は、これまで北波多中学校が取り組んできたことを基盤としながら、更に地域の教育力を活かし、恵まれた北波多の文化・歴史・自然等のよさを学ばせ、郷土を愛する心豊かな生徒の育成を図り、保護者や地域の信頼と期待に応える「魅力ある学校づくり」の推進に努めてまいりたいと考えています。

子どもたちから「元気」や「生きる力」をもらっています

S43卒　佐賀市東部支部　**江　頭　敏　男**

私たち小43卒は、卒業後、毎年１回同窓会を開催。大学での思い出や現場での教育実践を大いに語り合った。この会は退職後も続いており、毎年師走、それも27日頃である。佐賀は勿論、長崎、そして福岡から多くの同窓生が訪れ、懐かしい思い出の花を咲かせた。しかし、ある年齢に達した時から、会が途絶えてしまった。５、６年にもなろうか、年齢がそうしているのであろう。「今度、会おうか。」と呼びかけると「やろう。」と答えは返ってくるが、なかなか会が開かれない。年を重ねるたび、行動が消極的になると同時に、自分の殻に閉じこもり、「元気」や「生きる力」を少しずつなくしていくのであろう。

そこで、今、私はこの「生きる力」を大切にするため、まわりの人との交流を心掛けている。特に、子どもたちとの交流を大事にしている。毎朝、通学路に出かけ、子どもたちとのコミュニケーションを楽しんでいる。

この活動は、退職時の学校で、子どもたちの登校の見守り活動をお願いしたことから始まる。30名近くの皆さんから賛同を頂いて活動を開始。いろいろな助言を頂いた。当然、退職後は運営にも携わり、組織拡大を図るため、独自に規約や目標、活動計画等組織を立ち上げた。会員も200名を超える規模となった。町内の子どもたちのため「安全守りたい（隊）」「心育てたい（隊）」「学習教えたい（隊）」の３つの活動の柱を掲げ、会員と共に活動を展開している。いろいろな場で皆さんから感謝され、子どもたちから温かい感謝の言葉や手紙、そして、行政機関等やPTAからは、

農業体験でたくましく生きる力を育てる

S41卒　鳥栖基山支部　楢　崎　タキコ

「学力学力と言われる今、なぜ農業体験なのか。」学校を定年退職し、農業体験を中心に据えた「非営利活動法人、市村自然塾九州」に勤めること10年。ここは企業が青少年の健全育成の場として子どもの成長支援をしている施設です。子どもたちとどっぷりと自然に浸り、日々変わっていく子どもたちの姿を見て、農業体験の素晴らしさと必要性を感じ、私の教育観は変わりました。物が豊かになった今の時代、子どもから奪われたものは、「自然」「働くという労働」「友達や仲間」と言われています。また、社会体験、自然体験のないまま育つ子どもたち。夜遅くまでテレビを見たり、ゲームで遊んだりしてディスプレイに接する時間が多く、人と接する時間がとても少なくなっています。学校に来ても一番頭が働く時間にはまだ眠っている状態なのです。こんな子どもたちの実態から、育っていく過程で自然に接する場を多く作ってやることは、とても大切なことだと思います。

自然塾では、学校では見られない、子どもたちの心身共にたくましく成長していく姿を見ることができます。野菜や米作りを体験して「米作りをして、口に入るまでに88回以上の手間をかけて米ができるということを知りお百姓さんの苦労が分かり一粒一粒の米への思いも変わる」「人が生きているために食べているもの、農園で育てている野菜たち、すべてに命があることを学び、それを戴かないと生きていけない私たち。野菜や動物、魚などの生き物から命をもらっているので精一杯生きていく」「みんなのことを考えたり、譲り合ったり、我慢したりすることの難しさが分かり、本当の友達を作る大変さを知る」など、友達と相談をしながら農作業をしたり昔の人の暮らしを体験したりして、自主・自立・自律の精神を学び、コミュニケーション能力や周りの人への優しさ、感謝の気持ちを育んでいくのです。面倒くさいことを心をこめてやることで心は育っていくのです。鍬で畑を耕し除草をし、収穫の喜びをかみしめ、心細かった塾生活も友達ができ体力もつき、厳しい農作業も楽しさや喜びに変わっていきます。子どもたちの顔には自信に満ちた笑顔がいっぱいで何にでも自分から進んで生き生きと活動できるようになります。

このように、農業体験、自然体験を通して生きているものとの関わりを増やしていけば、子どもの中に命の大切さや感謝の心など優しさや思いやりが育っていくのです。子どもの頃に十分に自然を体験し自然の不思議さや神秘さに驚く心を持つ経験をすることが、生涯にわたって豊かな感性を持つことにつながると確信します。学校や家庭教育の中にも自然体験や農業体験を多く取り入れ、忘れかけられている人間力の回復を願いたいものです。

感謝状を頂いた。

風が強かろうが、雨が降ろうが、朝、７時になると、歩いて自分の持ち場に出かける。そして、子どもたちとあいさつや会話を楽しく交わす。

この間、高校生と会話。自転車から降りて、話を聞いてくれた。最後に「ありがとうございました。」という言葉。何か胸にじんとくるものがあり、会話から大きな喜びを感じた。同時に、充実感も湧いてくる。毎日の子どもたちとのコミュニケーションが、自分に確かな「やる気」「元気」「生きる力」を育んでくれている感じがする。どうやら子どもたちのためだけではなく、自分のためにやっているようにも思える。

今、改めて「教師をやってよかったなあ！」と思う。自分が教師であったこと、心を育む教育に従事したことを誇りに思う。そして、今でも「やる気」「元気」「生きる力」をもらっている子どもたちに感謝！

白石支部便り

平成25年度の白石支部は、現職会員67名、一般退職会員63名、特別会員40名で組織しました。２月に佐賀大学文化教育学部教授の田中右紀先生を講師に迎え、「文化教育学部の今後と佐大美術館について」と題してご講演をいただき、白石支部総会及び懇親会を開催しました。昨年開館した佐賀大学美術館のことや今後の文化教育学部の構想など会員一同興味津々で話に聞き入り、大好評でした。本部から宮尾会長と井上副会長もご参加いただき、花を添えてもらいました。

今後も会員同士の親睦を図りながら、支部活動を続けていきたいと思っておるところです。

（支部長：黒木正孝）

旅が教えてくれること

S62卒　県立私立支部
江　頭　かおり

旅好きの私にとって、思い出の地の一つが北海道の利尻島である。当時、島の高校に赴任していた友人から「絶品のウニ」話をいつも聞かされていた。いよいよ島の生活も最後、という年の夏に思い切って訪ねていくことにした。

前日には宗谷岬や釧路湿原へのドライブを楽しみ、いよいよ明日は利尻島。生来の食いしん坊はワクワクして北の果てに向かった。が、稚内から乗り継いだフェリーは夏休みの観光客でごった返し、騒がしくてイライラ。ゆっくりと座る場所もない。しかも外は雨模様。半分うんざりしながら船の揺れにまかせて眠ってしまった。

到着を告げるアナウンスの声に、ハッと目を覚まして外を見ると…、さっきまでの灰色の世界はどこにいったのか？真っ青な空と白い雲、そして見事な「利尻富士」が目の前に！そして港では、真っ黒に日焼けした友人が爽やかな笑顔で手を振っている。

嬉しさいっぱいの気持ちで、周囲60キロ位の島を案内してもらった。いろいろな角度から見る利尻山の豊かな表情はもちろん、美しく澄み切った海も、原生林に囲まれた神秘的な沼も、何もかもが感動もの。もちろん、ドライブの途中で食べたウニ丼も最高である。

どこへ立ち寄っても喜ぶ私を見て、友人はこの島の四季がどんなに美しいか、そして住んでいる人々がどんなに純粋で親切なのか鼻高々と語ってくれた。私の訪問をきっかけに、自分の住む町の「自然」と「人」を見直したらしい。私にとっても心を豊かにしてくれる素晴らしい島だった。

さて、北の旅から帰った私はあれこれ考えた挙句、友人へのお礼に伊万里の梨を選んだ。改めてまわりを見回してみると自慢できるものが多くて本当に迷ったが、今回は果物で大正解。離島では貴重品だった。同封した手紙にはこう書いた。「今度は私がもてなすよ。もっともっと美味しいものや見せたいものがあるから早くおいで！」と。旅から帰ってくるといつも、よそに住む友人たちに佐賀を案内したくてたまらなくなる。それも私が旅することをやめられない理由の一つらしい。

世界で一つだけの花

S56卒　藤津・鹿島支部
藤　戸　敏　和

毎年、５月と11月の下旬になると、我が家の花壇に植えている花の植え替えをする。先日も、ベゴニア・サルビア・ニチニチソウ・マリーゴールドなどの苗を植えた。植える前週には、半年間、私や家族の心を和ませてくれたパンジーやキンギョソウ、ナデシコなどの花を抜いた。そして、土を耕して少々の堆肥を入れ、よくかき混ぜて新しく植える苗のための土作りをした。

花を植えるときは、強い日差しや豪雨に負けず、綺麗な花を咲かせて欲しいと願いながら、一本一本丁寧に植えていく。「この花は、去年あの花壇に植えてあまりうまくいかなかったから今年はこちらの花壇に植えてみよう。」などと工夫もしている。花壇の花であろうが、鉢植えの花であろうが、育ち具合をよく見守り、水やりや草取りをし、時々肥料を与えてかわいがれば、綺麗な花を咲かせ私たちの心を和ませてくれる。「手塩にかけて育てる。」という言葉があるが、花は正直なものである。特に、寒い冬を越し、春・初夏を迎える頃に、つぼみを付け立派に花を咲かせることができた時の喜びは格別なものである。

小学校に勤務している私にとって、児童もまさにその通りである。一人一人個性があり、育ってきた家庭環境も違う。また、年々、様々な特性を持って入学してくる児童が増えてきている。我々教師にとっては、その子の特性を感じ取り、そして、保護者の考え方や願いを受け止め、専門職として、個に応じた粘り強い指導・支援をしていくことが大切な時代となってきた。

子どもたちを信じ、子どもたちの輝く笑顔を求めて、教職員や保護者、関係機関とチームを組み、プラス思考でがんばっていきたい。

県　立　私　立　支　部　便　り

平成25年７月20日に、県立私立支部の総会及び懇親会を佐賀市の「おおしま」で開催しました。有朋会本部から会長宮尾正隆様、西山武人様、井上正一郎様にご参加いただきました。宮尾会長様からは、美術館建設等、有朋会や佐賀大学の新しい動きなどについてもお話をいただき、大変有意義な会となりました。懇親会では近況を語り合い、それぞれが色々なところでつながっていることに驚くなど、和やかで楽しい会となりました。　（支部長：永田彰浩）

バイクに夢中

S45卒　佐賀市北部支部
百　武　幸　尚

定年退職後、２年目のことであった。佐賀市立図書館から旅の本を借りた。バイクの旅である。自分も風の中を走ってみたいなあ、知らない所へ行ってみたいなあと思うようになった。そこで、運転免許を取ることを思い立ち、自動車学校に行くことにした。教習所の若い先生からは、年寄りの冷や水と翻意するよう諭された。練習のせいで腰痛や四十肩になり通院したり、気持ちが萎えたりすることもあったが、年寄りの頑固さと執念で何とか中型二輪の免許を取ることができた。その時は、自動車学校の若い先生や病院の若い看護師さんから「良くがんばったね、偉い。」と褒められた。いい気分であった。

さあ、これから乗るバイクは数年前から家でほこりをかぶっていた、カワサキ・アストレア250である。旧型の単気筒なので、エンジン音はポトポトポトと昔懐かしい音がする。錆だらけで、油漏れもしていたので点検をしてもらい、チェーンやバッテリーの交換などの修理もすることになった。大変な出費だったが、仕方がない。

免許を取って初めて一般道で運転した時は、不安と興奮で足が震えた。天と地の間で生きていることの緊張と喜びを感じた。

しばらくして、雲仙へツーリングに行った。初日は小浜温泉で名物のちゃんぽんとお寿司の昼食を食べ、雲仙、普賢岳を目指した。久しぶりに見るその景色に昔を思い出し感慨ひとしおだった。島原では安いビジネスホテルに宿泊する。バイクの調子は良い。体調も良い。翌日はお城に行ったり、鯉を見たりした後、フェリーに乗って大牟田へ渡る。船上で初対面の若いライダーとお喋りをしている間に港に着く。そこからは沿岸道路444を一気に駆け、佐賀に帰り着く。ドキドキとワクワクの気分と、ちょっと筋肉痛を感じる、楽しい１泊２日の旅だった。今度は山寺に行きたいと考えている。そして四国八十八か所のお遍路。欲が出てくる。

今は、バイクに乗ってよかったなあと思う日々である。このまま、バイクに乗って残りの人生を一気に駆け抜けよう、なんてね。できたらいいなあ。

それ以上に大事なこと

H13卒　㈱日本旅行佐賀支店勤務
末　安　勇　喜

ありきたりの表現ですが、『光陰矢の如し』を正に実感しています。2001年３月に佐賀大学文化教育学部国際文化課程を卒業し、13年がたちました。振り返ると、新設の学科という響きに誘われ国際文化課程を選択し、大学生活を楽しんでいた当時が懐かしいかぎりです。

学部を卒業後、株式会社日本旅行に就職し、現在に至ります。団体旅行の営業を主軸に、教育旅行、一般企業、官公庁、宗教行事等、様々な分野における旅行需要に取り組んでおります。

在学中は、ヨーロッパ文化や異文化理解などを学んでいたことや、イベント好きの性格などが功を奏し、ぴったりな業種と思い込んでいました。仕事を選択する時に、その仕事が好きであることや興味があることは、それを継続するために絶対に必要です。ところが実際に十数年勤務し、『それ以上に大事なことがある』と感じております。知識や教養は、あるに越したことはありませんが、業務に携わっていると、否応なしに身についていきます。業務を通じて、コミュニケーション能力（特に対話する力）の重要性をお客様から教えていただきました。これは、私が従事する旅行業界だけでなく、全ての仕事に共通することだと思います。お客様の求めること（ニーズ）を正確に把握すること、私ができること（商品やサービス）や思いをこれまた確実かつ迅速にお伝えすることです。お客様や社内での会話において、この二つが綺麗にかみ合った時は、非常に良い仕事ができたと思っています。

とはいっても、何度も失敗してきましたし、時には厳しく指摘を受けることもあります。経営の神様が残した『失敗したところでやめてしまうから失敗になる。成功するところまで続ければ、それは成功になる。』を信じ、理想型により近づけるよう勉強の日々です。

本　部　便　り

総会・懇親会は？

期日　平成26年８月30日（土）

場所　マリトピア

受　付……13：00～
総　会……14：00～14：30
講演会……14：40～15：40
懇親会……15：50～17：50

・会費　3,000円　各学校委員や支部長へ申し込む。
・本部へはFAX（0952-25-5700）で。**当日申込も可。**
・会費は学校委員に前納するか、当日受付にて。
※講演会講師は、富吉賢太郎氏。
※今年度のお世話担当は、昭和59年度卒の皆さん。

追 悼 会 は？

期日　平成26年11月16日（日）

場所　願正寺

受　付……９：30～
追悼会……10：00～11：00

※明治24年「総集会」として発足し、本会最大の年行事として継承。
※明治26年当時の全会員128名の浄財で願正寺の一隅に石碑を建立し、全会員参加による追悼会が開催され現在に至る。

平成26年度　有朋会本部 行事予定

月	日	曜	本部行事	備考
4	1	火	教職員異動新聞発表	異動報告は11日まで
	14	月	第１回正副会長会（18：00～）	代議員名簿締切23日
	19	土	第１回本部役員会（18：00～）	採用試験支援開始 ４月７日、16日、23日
5	17	土	第１回支部長及び事務担当合同会議（10：00～）	採用試験支援２次 ５月14日、19日～23日
	31	土	会報33号執筆者締切り〔２月15日原稿依頼〕	
6	5	木	会報33号　編集会議（２回校正）	採用試験支援３次 ６月４日、６日
	11	水	59卒世話役の依頼	
	13	金	各支部会報部数調査	
	19	木	第２回正副会長会（18：00～）	
	25	水	59卒世話役代表者の打合せ（19：00～）	
7	1	火	喜寿、還暦、感謝状　締切	
			本年度の物故者、喜寿、還暦対象者の確認依頼	退職含む会員調査締切
	9	水	会報33号　発送開始	採用試験支援４次 ６月30日～７月18日
	10	木	第３回　正副会長会	
	中		喜寿祝賀該当者、感謝状受賞者決定	
	23	水	59卒世話役の打合せ（19：00～）	
	25	金	会員数調査　締切　会費＝月末締切	現職の会費納入締切
8	1	金	懇親会参加申し込み　締切	教員採用試験支援５次 ７月28日～８月８日
	6	水	学部意見交換会（学部課程代表）多目的室（18：00～）	
	9	土	第２回キャンパス婚予定（10：00～14：30）	
	30	土	総会・懇親会　マリトピア（14：00～） 直前打合せ：本部・59卒　12：30集合	教員採用試験支援６次 ８月18日～22日
9	4	木	就職支援講座反省会（12：00～13：00）	
	26	金	平成25年度追悼対象者報告　第１次締切	退職会員の会費納入締切
10	1	水	追悼会案内の発送	
	2	木	第４回正副会長会（18：00～）	
	17	金	平成26年度追悼対象者報告　最終締切	
	25	土	本部役員会（10：00～）	
11	7	金	文化教育学部世話人会（19：00～）	
	15	土	願正寺との打合せ及び前日準備　事務局	佐賀県青春寮歌祭
	16	日	追悼会「願正寺」（８：30～11：30）	
12	4	木	第５回正副会長会（18：00～）	
1	14	水	学部意見交換会（学部課程就職担当）多目的室（18：00～）	未納会費の納入締切
2	14	土	第２回支部長及び事務担当合同会議（10：00～）	
3	24	火	佐賀大学卒業式（10：00～）祝賀会（12：30～）	
	27	金	有朋会監査（10：00～）	

キャンパス婚に参加してみませんか！

- **日時**　平成26年８月９日（土）
  10：00～14：30（受付　９：30～）
- **場所**　佐大本庄キャンパス
- **対象**　20代～40代の独身男女
- **費用**　2,000円　菱の実会館に集合

【プログラム】

(1)　恋に仕事に役立つコミュニケーション講座
(2)　ランチタイム
(3)　ゲーム＆交流タイム
(4)　マッチングタイム

菱の実会館へ問合せ
TEL　0952-23-1253

会 費 納 入 へ の お 願 い

※会費納入は、基本的に下記の要領で！

特別会員（師範学校卒業）の方は免除。
会報が必要な方は、校区小学校の学校委員に連絡を。

【１】県内学校勤務の会員は？
学校単位で徴収し、支部の事務局へ納入。

【２】県内の退職会員は？
校区の小学校に持参するか、同封伝票で。
金額は地区により異なるので確認を。

【３】県外会員の方は？
各県の事務局へ納入。年会費は、1,300円。
福岡県は支部費を含み、2,300円。
新規納入の方は同封の伝票でも可。

【４】卒業後６年経過の会員は？
県内在住者は、上記１、２の方法で。
県外在住者は、別添振込み用紙で、郵便局口座に納入。

33号
発行日　平成26年７月１日（火）
発行者　有朋会会長　宮尾正隆
編集者　編集部長　山口久美子

住　所　〒840-8502　佐賀市本庄町本庄１
佐賀大学菱の実会館　TEL 0952-23-1253
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
HP http://dousou.ext.saga-u.ac.jp